

# 消息往来

## ——廣瀬淡窓と青山延光の場合

高 橋 昌 彦

豊後日田の廣瀬淡窓は、その人生の大半を九州から出ることなく生きた（一度、下関まで訪れていることは、後出）。私塾咸宜園は、もちろん知られる存在ではあったが、詩集『遠思樓詩鈔』（天保八年初編・嘉永元年二編）の刊行とともに、その名声は一躍全国に広がった。諸本の多さを見て<sup>注1</sup>も、読者の広がり<sup>注2</sup>をうかがうことができ、教えを乞うものや交流を求めるものが増えたことは、言うまでもない。淡窓の交流は、全集中の日記や自叙伝「懷旧樓筆記」とともに、近年の書簡集成の編集・刊行<sup>注3</sup>によって、より鮮明に探ることができるようになった。改めて手紙の重要性が認識されたと言える。

さて、これまで全く指摘されることがなかったが、水戸藩の青山延光もまた、交流を求めた一人であった。架蔵の一品は、延光の淡窓宛書簡が一通、淡窓から延光宛の返信が一通と淡窓が贈った題後一篇を卷子に装丁した形になっている。本稿は、この一卷を紹介し、淡窓の当時の交流の様子や種々知り得た事柄について記述するものである。

青山延光は、水戸藩の儒者で、詳伝がその男勇之介によって『先考行状』（以下『行状』と略す）としてまとめられ、明治二十八年に刊行されている。諱は延光、字は伯卿、通称量太郎、春夢・佩弦齋・

晩翠などと号した。文化四年（一八〇七）十月二十三日生、明治三年（一八七〇）九月二十九日没、享年六十四<sup>注4</sup>。彰考館（史館）や藩校弘道館の要職を歴任し、活躍した人物ではあるが、同時期の会沢正志齋や藤田東湖等に比較して、取り上げられる機会が少ない人物である。青山家の子孫である山川菊栄は『覺書幕末の水戸藩』<sup>注5</sup>で、延光についての吉田松陰や徳川斉昭との逸話を述べつつ、以下のように記している。

…大兵肥満で、小山のような身体をどつかとすえ、口数が少くて、いつも柔らかな顔に微笑を浮かべていた延光は、かつて人と争わず、人物評はおろか、他人の詩文の批評すら好まぬ人であった。眠っているのか、さめているのか、バカなのか、ボーッとしているつかまえ所がなく、不得要領なりに何となく安心してつきあえるので、藤田派にも、その反対派にも敵がなかった。……延寿はこの長兄を評して「韜晦の名人だ、バカのふりをしているから、皆が字のよめるバカだと思って安心している。あんな人をくった男はない」といつていた。

『行状』冒頭に載る明治二年の延光肖像を見ると、高齢のせいか、小山のような体型にも柔和にも見えませんが、つかみ所はなさそうな印

象だ。『行状』にも、

…先考人と為り、温厚恭謙。名を求めず、能を矜らず、世と競はず、人と争はず。澹泊寧静を以て、自ら処る。凡そ交際に於て、善惡黑白を甚だ分けず。群れて党せず。且つ容易に時事を談ぜず。惟だ春風和氣を以て人に接す。其の風采超然として、野鶴の雞群にあるがごとし。(原漢文)

とあり、続けて自分は表に出ず、会沢や藤田・豊田天功を推していたと具體的な行動を綴っている。そんな消極的な面ばかりがうかがえる延光だが、以下の書簡は、面識のない淡窓に、紹介者もなく突然送った内容となっている。



翻字にあたって、書簡の句読点は執筆者が適宜施し、旧字体は新字体に改めている。

### 青山延光書簡

謹呈一書候。未得拝顔候へ共、残暑之砌、弥御万福被為成御消光、恐喜之至奉存候。扱、小子儀幼年より詩学ヲ好候処、一体国史之方家学ニ有之、詩学専力ハ不相成、唯々随意吟咏のみニ御座候所、天下ニ於而推服仕候ハ、先生之御詩学ニ御座候故、一度拙稿相呈し是正ヲ願度存居候へ共、千里隔絶空しく打過候事ニ御座候。然所、近比西海書生来訪之節、先生七句ニ被及候由話承り、急ニ存立拙稿相呈可申と旧稿整理仕候へ共、何れも蕪雜之儀故、別巻桜花之作ニても相呈可申と即一写仕候所、篇数有之のみにて雷覽ヲ任候儀ハ恥入

候事ニ候得共、数十年之旧癖之事故、何卒御一覽被成下候様奉希候。尤御賞譽等ヲ願候次第第二無之、右之内少々も可ナリ之詩も可有之哉。又ハ何れも詩ニ相成中間敷候や之所、一語之御評何度迄ニ御座候。一首も貴意ニ叶不申事ニ御座候ハ、御毀裂被下御返答ニも不及事ニ御座候。全く年来推服奉り候事故、不顧固陋呈覽之儀、何卒御憫察可被下候。扱又別冊拙著一冊進呈仕候。御一覽被下候ハ、大慶仕候。右桜花之詩も目錄中へハ入候へ共、上木之念ハ曾而無之候。先ハ前文奉願度、万々如此御座候。已上

六月廿七日

延光再拝

淡窓先生

座右

再啓 梅墩先生御詩名も近々此地にて承知仕候。此節ハ浪華辺ニ御寓居とも承り候へ共、伝説のみにてしかと仕候事ニ無之、もし此節ハ御同居も御座候ハ、何分御一覽奉願候。もし御返書被下候ハ、京都屋敷之富長六大夫方迄御届ニ相成候へは、弊藩迄相達候事ニ御座候。余期後音候。以上

書中には、一字分、見せ消ちがあり、「好」を「癖」に直している。青山家は水戸藩に仕え、特に父延于も『大日本史』編纂で重要な役割を果たした人物で、後出する「皇朝史略」は延于のよく知られた著作である。家学を史学としているのもつともなことと言えよう。しかし、自分は詩学が好きで、以前より淡窓との交流を求めていたが果たせないままであった。高齢である淡窓に、何とか自作の評価をと依頼する気持ちが強く出た内容となっている。

さて、江戸後期の水戸藩の派閥争いは夙によく知られ、奈良本辰

也<sup>(注5)</sup>、

…確かに水戸の政争は、すさまじかった。多くの人材がいたのだが、政争の激化がしばしばクーデタにまで発展し、その度に多くの人材が処罰されていった。明治の政府となつてから、勤王の先駆を続けた藩というので、誰かを選び出して高官に据えようとしたが、そうした人材は見つからなかったという。

と解説し、「薩摩警部に水戸巡査」ということばを使つて、人材の少なさを述べている。延光が対立する派閥間に入つて奔走したことは、前掲山川の文章からもわかることである。この書簡の年次は、後掲、淡窓の返信に付された題後一篇の日付「癸丑孟秋」から、嘉永六年（一八五三）七月の前年と考えられる。嘉永五年が延光にとつてどんな年だったのか、『水藩修史事略』<sup>(注6)</sup>を使つて追いかけてみる。『大日本史』紀伝全巻の上木を、徳川光圀薨後百五十年に当たる嘉永二年に終えるべく、作業は金銭的な問題や編集方針の違いなどがある中、続けられており、何とか板刻が済み、廟前に献じることができた。その後、誤脱などの訂正を行い、幕府へ贈呈したのが嘉永五年二月七日、朝廷への献上が同月二十九日であった。そして、三月二十二日には、

進献の事結了せるを以て、史館一同へ酒肴を賜はり、且つ褒美として金品を賜ふこと差あり。殊に青山延光は、当時会沢安豊田亮等、未だ職に復せざるを以て、独力担当以て、校刊の事を了し、且つ烈公に代つて、跋文起草したるの功労を多とし、文化中藤田一正の上表を起草したるに準じ、賞資最も渥かりしと云ふ。

とある。他の主な担当者が離職している中、一人責任を背負い、さ

らには徳川斉昭の跋文代作まで行つたという。つまり、一時的にせよ、重責から解放され一息ついた時期であつたとわかる。

書簡は、たまたま九州から来た書生から、淡窓が七十歳近くの高齢と聞き、急ぎ自らの著述をまとめ、同封したとある。嘉永五年、淡窓の年齢は七十一であった。水戸藩に遊学する他藩士は、江戸後期になると増加した。その多くは会沢正志齋のもとを訪れていた。『新論』（安政四年刊）の影響であつた。西国（九州）では、特に久留米藩士や佐賀藩士が多かつたが、会沢塾に立ち寄る中で、延光とも接点を持つ者がいた。その一部が、久野勝弥編『他藩士の見た水戸』（水戸史学会・平成三年）に紹介されている。例えば、熊本藩士官部鼎蔵や吉田松陰の会沢訪問は、嘉永四年十二月になる。松陰の日記に延光の名前は見えるが、官部の方には出てこない。おそらくこのような人物から話を聞いたのだろう。

同封した作品のうち「別巻桜花之作」は「名花有声画」を指し、「別冊拙著一冊」は「赤穂四十七士伝」を指す。「赤穂四十七士伝」は「佩弦斎雜著」の巻一として嘉永三年に刊行されていたが、この時点で「名花有声画」の方は、佩弦斎雜著の冒頭目録に、書名は見えるが出版されていない。先賢文庫には「佩弦斎雜著巻一」が残っている。淡窓は応えるべく、二作品を採り上げ、題後一篇を送つたということになる。

書簡の日付は「六月廿七日」で、淡窓の返信冒頭に出てくる日付と齟齬がある。これ以外にも書簡があつたということだろうか。後でまた触れることにする。

尚々書きには、淡窓の弟旭莊が大坂にいたのではという話を載せる。『梅墩先生詩鈔』の刊行は嘉永元年、旭莊の名も全国的に広まっ

ていた。返信によれば、この書簡は大坂経由で送られているため、旭莊のもとに届けられたものといえる。淡窓の日記に書簡の記事はない。ただ、旭莊を通じてとなると「日間瑣事備忘」で確認することができ。嘉永五年九月八日に「水戸邸人」が来て、延光書簡の淡窓へのつなぎを頼まれている。そして、翌日には他の書簡とともに日田に送るように指示をする。一方、淡窓からの返信が旭莊のもとに届いたのは、翌年八月十九日、次の日に「水戸倉邸留守」に届けさせている。書簡は、水戸から水戸藩京屋敷の富長六大夫を通じて大坂の水戸藩蔵屋敷へ、そして旭莊から淡窓へと送付されたことになる。どうやら発信から届くまでに三ヶ月はかかっているようだ。次に淡窓の返信を見ていく。



### 廣瀬淡窓書簡

去秋七月十四日之書翰、浪花より相達敬読仕候。如高論未得拝願候得共、益御清福之段奉拝賀候。随而小生乍老衰存活仕候。乍憚御放念可被下候。然は尊書之四十七士伝・名花有声画・寄合書一葉御寄示被下、且御懇志之程委曲被仰下、千万感佩仕候。小生幼年より多病、赤関より東江は罷越候儀無之、且眼疾有之独学も行届き不申、誠二固陋之村学にて御座候。達御高聴且御推奨被下、汗背之至二候。何ソ愚意申上候様被仰聞候得共、中々難及、乍然御厚意難黙止、小文一首付卷末候。有声画は御写本二奉返進仕候。其末二拙跋相録申度候得共、眼疾不能細字、別紙相認候。只区々之寸枕を表候迄二候。御笑読被下候ハ、幸甚二候。四十七士伝は拝受家藏と仕、尚又時々

展読之心得二候。

一 御令弟様より御書束并御草稿御寄示被下、愚答さし出候。御転致奉願候。御寄合書其外御唱和之御模様二而、御家門之盛成儀、得と承知仕、不堪欣羨候。

一 皇朝史略は僻郷之書所持不仕、一寸他方二而一読仕候儀有之、御家より出候儀ハ始而承知仕候。国史紀事大著作、誠二盛成儀二候。何卒成全御彫刻二相成度候。小生陋学著述忤仕候訳二は無之、但シ拙詩集続編并義府と申もの一冊、近年上木仕候。詩集ハ経御覽候事も可有之哉。先進呈仕候。御笑読被下候ハ、辱奉存候。

一 謙吉儀御加筆被下、忝奉存候。同人浪花住居之形二相成居候。此節之尊東も同人より相達候。御厚意之程為知遣候可申候。

一 私眼疾二而執筆不任意、仍而手紙ハ愚息範治と申者二代筆申付候。此段御了恕奉願候。小生当年七十二老體極而甚布候。御憐察可被下候。

右拝答迄、如斯二御座候。恐惶謹言

廣瀬求馬

七月五日  
青山量太郎様

梧右

淡窓の返信によれば、先に触れた二作品の他に「寄合書一葉」があつたことがわかる。さらには、弟青山延寿の書簡・草稿、「皇朝史略」も届いたようなので、それらのことが書かれた書簡も同封してあつたと思われる。それが「去秋七月十四日之書翰」ということかもしれない。自分は現在眼病で、最後にはこの返信も息子（養子）の青郎が代筆したものとの断りを入れている。



さて、弟延寿の草稿とは、後に刊行される『堦簾小集』（明治三年刊）の草稿を指すと思われる。「堦簾」とは兄弟仲睦まじいことを意味し、兄弟四人の詩文を集めた内容となっている。次兄延昌（佐藤家の養子へ）・三兄延之（佐佐木家の養子へ）も学者として活躍、それを「御家門之盛成儀」と表している。『堦簾小集』巻四所載の延寿の詩には、頭欄に淡窓の評語が十箇所ほど出てくる。例えば、五言古詩「読四家詩二首（原四茶山山陽淡窓星巖）」は、もと四首あったうちの頼山陽と淡窓の二首のみが掲載され、淡窓は山陽を読んだ詩にのみ、評を付している。延寿は山陽の詩を干将の名剣のように鋭いと譬え、また著す史書は雄詞に溢れていると述べる。それに淡窓は「山陽を評する処、皆肯綮（こうけい、要所の意）に中る」（原漢文）と評している。自身を読んだ詩に評はないが、延寿が淡窓の詩をどのように見ていたのかを引いておこう。

我愛遠思樓

我は愛す 遠思樓

詩壇別建旗

詩壇 別に旗を建つ

一掃楊兼范

一掃し 楊と范とを兼ね

遠派韋柳詞

遠く韋柳の詞を<sup>さかのほ</sup>る

句中不競巧

句中 巧を競はず

句外要著思

句外 要は思ひを著す

始觀澹如水

始めて観るに澹なること水のごとく

玩味稍覺奇

玩味 稍 奇を覺ゆ

看彼逐春鳥

看よ 彼の春を逐ふ鳥

嬌啼固可怡

嬌<sup>きやう</sup>啼（美しいさえずり） 固より怡<sup>よろこ</sup>ぶべし

何如冲霄鶴

何ぞ冲霄の鶴に如ん

清響聞雲達

清響 雲<sup>き</sup>達（雲の道）に聞く

何以評此翁

何を以て此の翁を評さん

翁自論翁詩

翁自ら翁の詩を論ず

苟存敦厚意

苟くも敦厚の意存すれば

風教可維持

風教 維持すべし

只覺規模隘

只覺ゆ 規模の隘<sup>せま</sup>きを

疆域或有虧

疆域 或は虧<sup>きず</sup>（欠ける）有らん

要之蜀先主

之れを要すれば 蜀の先主（劉備のこと）

正統誰不推

正統 誰か推さざらん

七・八句で、淡泊さは水のようにでありながら、意味を味わうと次第に奇を感じる詩と詠じている。十四句目「翁自論翁詩」とは、『遠思樓詩鈔』巻上の五言古詩「論詩贈小関長卿中島子玉」をさし、十五・十六句目は、ほぼ同詩から詩句を引用している。「敦厚（真心が厚い）」は詩を学ぶ上での根幹、それを読み取っての表現であった。

「皇朝史略」については先にも触れたが、父延于の著作で、この刊行にはまた水戸藩内部でのゴタゴタがあった。前掲山川には「皇朝史略をめぐって」の文章があり、さらに小松徳年<sup>（注11）</sup>もその経緯や特色を述べている。同書も先賢文庫に所蔵されている。

『国史紀事大著作』とあるのは、延光の『国史紀事本末』を指すと思われる。大部の書で二十冊が明治九年に刊行されており、この時は、その一部のみの紹介ではなかったかと思われる。清水正健『増補水戸の文籍』（水戸の学風普及会・昭和四十六年再版）によれば、凡四十巻。文久元年成り。明治九年刊行す。第一巻神武東征より第四十巻神器入京まで。凡五十八目を設け。二千餘載。治乱盛衰の跡を録す。即ち宋の袁樞が通鑑紀事本末。明の陳邦瞻が宋史紀事本末の體例に倣ひ。大日本史を排纂して。事の始末を。

一覽の下に瞭然たらしめしものなり。

と解説があり、その続編もある。淡窓の著作『義府』は嘉永二年に刊行、この時の返礼として贈られたようだ。「謙吉」は旭荘のことで、前述のように、書簡が大坂経由で日田に届いたことを記す。



最後に、一緒に送られた題後一篇を紹介する。これは、「珮弦斎雜著」の一つとして、後に上梓された「名花有声画」の末尾に訓点を付して収まることになる（慶応二年刊、国立国会図書館野文庫蔵）。但し、一箇所版本では文字の変更有り、傍線部一境が「地」となっている（傍線、執筆者）。

### 題後一篇

題青山君所著二書後

印（荅陽）

赤穂四十七士、為主報仇、捨生取死、人之義者也。桜花之美、移之異域則不育、花之義者也。

青山君撰義士伝、著名花有声画、想其好義如渴者乎。伏惟

西山先公篤崇儒術大播文教、一洗鎌倉氏以來兵革之習、比諸王朝盛時、又有加焉。余沢所延近二百年而益盛。予生窮賤、每恨不一履其境觀典刑所存、而

君寄示二書以求納交、何其幸也。

君之有此撰、將以激貪起懦而裨邦教云爾。顧堯舜設教之邦鞠為異土、弁髮胡服受制羯奴、我願以此二書、伝之海外則其所裨益、何唯扶桑

之州乎。癸丑孟秋 廣瀬建書

（書き下し文）

青山君著す所の二書の後に題す

赤穂四十七士、主のために仇を報じ、生を捨て死を取ることに、人の義者なり。桜花の美、これを異域に移せば則ち育たざること、花の義者なり。青山君の義士伝を撰し、名花有声画を著す、その好義を想ふこと渴する者のごときか。伏して惟れ、西山先公篤く儒術を崇び、大いに文教を播き、鎌倉氏以来兵革の習を一洗す。諸を王朝の盛時に比するに、又加ふるあり。余沢の延ぶる所、二百年に近くして益ます盛んなり。予、窮賤に生じ、毎に一に其の境を履み、典刑の存する所を觀ざるを恨む。而るに君、二書を寄せ示し、以て納交を求む。何ぞ其れ幸ならんや。君の此の撰あるは、將に以て貪を激し懦を起こして、邦教を裨せんとするといふのみ。顧みるに堯舜設教の邦、鞠して異土となり、弁髮胡服、羯奴の受制す。我願ふは此の二書を以て、之れ海外に伝ふれば則ち、其の裨益する所、何ぞ唯だ扶桑の州のみならんや。癸丑孟秋、廣瀬建書す。

水戸藩が西山公（徳川光圀）のお蔭で、文事に通じた藩であることを称え、これらの書物は清国に伝えられるべき書物とまとめている。さぞや、貰った側は喜んだことだろう。だからこそ、淡窓没後でも版本の跋文として入れたと言えよう。書簡は往復揃うことで見えてくるものがある。廣瀬淡窓の詩人としての評価を知る上で、この一卷はその良い例と言えるだろう。

印（廣瀬建印）印（子基）

注

- (1) 拙著『大分県先哲叢書 廣瀬淡窓』(大分県教育委員会・二〇一四年)、鈴木理恵『咸宜園教育の展開』(広島大学出版会・二〇二二年)に詳しい。
- (2) 大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書 廣瀬淡窓資料集書簡集成』(大分県教育委員会・二〇二二年)
- (3) 『行状』には「(明治)四年庚午九月廿九日」に「六十四」で没したと載る。明治四年の干支は「辛未」で、「庚午」は三年になるため、記述に誤りがあると言える。享年や『行状』の末尾に没後二十五年を経た明治二十七年に書かれたという記述を信じれば、三年ととるべきである。多くの先行文献は明治四年説をとるが、『三百藩家臣人名事典 第二卷(新人物往来社・一九八八年)』は三年説をとり、『国書人名辞典』はそれをうけている。
- (4) 岩波文庫・一九九一年。山川菊栄は延光の末弟延寿の孫にあたる。山川は、延寿家に残る資料をもとに執筆。同資料をはじめとして青山家の資料については、木戸之都子「青山延寿研究——履歴と著作目録を中心に——」(『人文コミュニケーション学科論集』三号・二〇〇七年)に詳しい。また、延光と豊田天功との書簡から関係性を追った、井坂清信『江戸時代後期の水戸藩儒』(汲古書院・平成二十五年)もある。
- (5) 注4『寛書幕末の水戸藩』解説。
- (6) 栗田勤編、大岡山書店・昭和三年発行。
- (7) 『佩弦齋雜著目録』には、「赤穂四十七士伝・刀剣録・名花有声画・南狩野史・三藩事略」の書名が見える。

(8) 中村幸彦・井上敏幸編『広瀬先賢文庫目録』(広瀬先賢文庫・平成七年)

(9) 『廣瀬旭莊全集 日記篇五』(思文閣出版・昭和五十八年)

(10) 藤田東湖『丁酉日録』天保八年三月晦日の条に富長の名が出る(『東湖全集』博文館・明治四十二年)。この時期は江戸藩邸におり、その後京へ移ったものか。

(11) 『水戸藩の文化と庶民の生活』(郷土ひたち文化研究会・平成十三年)。同書中、『大日本史』が未完成なのに、『大日本史』の要約本のような『皇朝史略』の出版には反対の声が激しかった旨が詳しく紹介されている。

(12) 自筆本は国立国会図書館所蔵。続編共十四冊。また、刊本に、二十一卷十冊本があり、明治四年に出ている。

付記

本稿を成すにあたり、貴重な蔵書の閲覧を許可された各所蔵機関に御礼申し上げます。なお、本稿は、日田市からの受託研究の成果の一部である。

